様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 １８ 日現在

機関番号：３４４２４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2015
課題番号：２４７３０６１０

研究課題名（和文）自己愛傾向によってもたらされる対人葛藤を抑制する要因の解明

研究課題名（英文）The inhibition factors of narcissists' interpersonal conflict

研究代表者
阿部　晋吾（Abe, Shingo）

梅花女子大学・公私立大学の部局等・教授

研究者番号：００４４１０９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では自己愛性対人葛藤の抑制要因を解明することを目的とした。研究Ｉでは、自己愛傾向が高いほど夫婦ともに怒りを表出しやすくなり、また相手から怒りを表出されることによって自分も怒りを感じやすく、それが夫婦関係満足を低下させることが明らかとなった。その一方で、ユーモア対処は、怒りの表出を抑制することが示された。これらの結果から、自己愛傾向の高い個人がユーモアによる対処方略を獲得することで、夫婦間葛藤につながる怒りの表出を抑制できる可能性が示唆された。研究Ⅱでは、ユーモア対処を高めるための簡易的なトレーニングを実施したところ、限定的ではあるがユーモアトレーニングの有効性が確認された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to find the inhibition factors of narcissistic interpersonal conflicts. Study1 examined the effects of narcissism and humor coping on anger expression in marital relations. The results showed that the opponent's frequency of anger expression was positively correlated with the frequency of anger, which in turn was negatively correlated with marital satisfaction. In addition, while husbands and wives with high narcissism were likely to express their anger, humor coping was negatively correlated with anger expression. These results suggest the effectiveness of humor coping in marital conflicts. In study2, an easy training to obtain humor coping was conducted. The results showed that the humor training was slightly effective.

研究分野：社会心理学

キーワード：自己愛傾向　怒り　対人葛藤　夫婦間葛藤　ユーモア

１．研究開始当初の背景

自己愛傾向とは、自分自身への関心の集中と、自信や優越感などの自分自身に対する肯定的感覚、さらにその感覚を維持したいという欲求によって特徴づけられる性格特性である（小塩, 1998）。高自己愛傾向者は、自己評価の「高さ」と「不安定さ」を併せ持つため、些細なことにも傷つきやすく、攻撃的に反応しやすいことが知られている(自己本位性脅威モデル：Bushman & Baumeister, 1998)。

怒りを伴う攻撃が人間関係において建設的な役割を果たすためには、攻撃の受け手がその怒りを「正当」だと評価することが重要である（阿部・高木, 2005a, 2007）。しかし、自己愛傾向が高い個人の怒りは、受け手からは不当だと判断されることが多い。なぜなら、高自己愛者は傷つきやすく、自分に対してなされる配慮への期待値が高いため、受けた被害の大きさや相手の責任性を過度に重く評価し、「自分こそが被害者だ」「悲劇の主人公だ」したがって「自分が相手にぶつける怒りは正当だ」と過信しやすいからである（阿部・高木, 2006b）。その結果、相手との間に正当性評価のズレが生じやすく、当事者双方が自分の正当性と相手の不当性を訴え、さらなる対人葛藤のエスカレーションを引き起こすことになる。本研究では、これを自己愛によってもたらされる攻撃である「自己愛性攻撃(Thomaes et al., 2009)」に倣って、「自己愛性対人葛藤」と呼ぶことにする。

ところで、自己愛性攻撃の抑制要因に関してはこれまでにも研究が進められており（阿部, 2011）、相手との類似点をみつける（Konrath et al, 2006）、他者の視点を取得する(Finkel et al., 2009)、自己概念を明確化する(Thomaes et al, 2009)などが有効であることが示唆されている。ただし、これらは実験室での単発的な攻撃を指標としたものが多く、日常場面において相互作用を伴う自己愛性対人葛藤に対しても当てはまるかは十分に検討されていない。また、一般的な対人葛藤を抑制する行動スタイルとしては、協調的・非協調的志向性（相馬他, 2004）、対人ストレスユーモア対処（椙本・山崎, 2010）などが挙げられている。しかし、これらが自己愛性対人葛藤においても有効であるかは明らかではない。

２．研究の目的

本研究では、これまでに自己愛傾向と対人葛藤との関連について検討した申請者の研究成果（阿部, 2011； 阿部・高木, 2006b）をもとに項目を作成し、夫婦を対象とした質問紙調査によるペアデータや 2 時点データを分析することで、自己愛性対人葛藤の抑制要因を解明する。具体的には以下の 3 点を検討する。

(1)対人葛藤の抑制に関わる行動スタイルと自己愛傾向の関連性の検討

自己愛傾向（小塩, 1998）と合わせて、対人葛藤の抑制要因として取り上げられている対人ストレスユーモア対処（椙本・山崎、2010）といった行動スタイルを測定する尺度を用意して質問紙調査を実施し、自己愛傾向との間に相関がみられるのか、また自己愛性対人葛藤に対して抑制効果を持っているのかを検討する。

(2)ペアデータによる自己愛傾向の類似性が対人葛藤に及ぼす影響の検討

正当性評価のズレの生じやすさから考えると、高自己愛傾向者同士の対人葛藤は最もエスカレーションが生じやすくなると予測される。しかしその一方で、高自己愛傾向者は自分と類似している他者には攻撃しにくいことも明らかとなっている（Konrath et al, 2006）。これは自己愛傾向そのものの類似性にも当てはまるのであろうか。そこでペアデータから自己愛傾向や、Big Five 性格特性(TIPI-J:小塩・阿部・カトローニ, 2011)の類似性を算出した上で、対人葛藤に及ぼす影響について検討する。

(3）2 時点データによる自己愛性対人葛藤の抑制要因の検討

質問紙調査を２時点で実施し、事前調査の際に対象者を無作為に割り振り、条件ごとに質問紙上で他者視点の取得や自己概念の明確化を促す課題を実施する。そして、2 週間後の事後調査において、その期間内における対人葛藤状況について回答してもらい、条件間での差異を検討する。

近年アメリカでは自己愛傾向得点の上昇が示されており、「自己愛の大発生」とも呼ばれる状況となっている（Twenge & Campbell, 2009）。日本でも同様の上昇傾向が認められており(三船, 2010)、自己愛性対人葛藤が生じる可能性も高くなってきているといえよう。従来の研究は自己愛傾向による攻撃や対人葛藤の「原因」を探るものが多いが、本研究では自己愛性対人葛藤の「解決」につながる知見を得ることを目的としている。本研究の結果から、自己愛傾向と特定の行動スタイルとの負の相関が弱く、かつその行動スタイルが自己愛性対人葛藤の抑制にも有効であることが確認されれば、高自己愛傾向者にも獲得可能な解決策を提示することができる。また、ペアデータを用いることによって、自己愛傾向や性格特性の類似性を分析対象にできるだけでなく、日常的に自己愛性攻撃の被害者となっているパートナーにも、葛藤解決のための方略を提案できる可能性がある。パートナーの行動スタイルもまた自己愛性対人葛藤の進展に影響しているのであれば、その行動を修正することで、高自己愛傾向者に直接アプローチしなくても葛藤解決に導くことができるからである。さらに、相関的なデータだけでなく２時点データを取得する

ことで、より明確に因果関係を特定することができ、自己愛性対人葛藤への介入方法や、加害者、被害者への支援プログラム、さらには予防的・教育的プログラムの開発にもつながると考えられる。

３．研究の方法

(1)調査Ⅰ

三重県Ａ中学校の全校生徒 572 名の両親を対象とした。担任教員から生徒を通じて両親に質問紙を配布し約 2 週間後に回収した。回答は夫婦別々に行うよう教示し、回答後すぐに個別の封筒に入れて封をしてもらい、それを 1 つの封筒にまとめて生徒を通じて回収した。夫婦ペアでの回収数は 288 であった(回収率 50.35%)。

質問項目は、以下のものを使用した。夫婦関係満足：諸井(1996)の夫婦関係満足尺度を使用した(6 項目､4 件法。夫: α=.94､妻: α=.95)。自己愛傾向: 小塩(1998)の自己愛人格目録短縮版の一部を抜粋して使用した(9 項目、5 件法。夫: α=.88、妻: α=.84)。対人ストレスユーモアコーピング: 椙本･山崎(2010)の対人ストレスユーモア対処尺度の一部を抜粋して使用した(5 項目､5 件法。夫: α=.84､妻: α=.82)。怒り喚起・表出・被表出の頻度: いずれも独自に作成した各 1 項目を使用した。選択肢は「1. 全くなかった」「2. 1～2 回」「3. 3～6 回」「4. 1 日に 1 回程度」「5. 1 日に 2～3 回」「6. 1 日に 4 回以上」の 6 件法である。なお、怒りの喚起・表出と、被表出の頻度の質問の順序についてはカウンターバランスを取った。

(2)調査Ⅱ

Web 上で調査の実施および介入の教示を行った。調査会社(株式会社クロス・マーケティング)を通じてモニター登録者に調査依頼し、夫婦 749 組、1498 名の回答を得た。

調査には夫婦双方が同じ質問項目に回答した。2014 年 7 月に事前調査を実施し、その 2 週間後に事後調査を実施した。事前調査では、自己愛傾向(NPI35; 小西他, 2006; 夫 α= .96、妻 α= .96)、ユーモアコーピング（椙本・山崎、 2010; 夫 α= .95、妻 α= .93）を測定すると同時に、対象者を夫婦単位で無作為に折半し、ユーモアコーピングの獲得を促す課題を提示する条件(介入条件)と、課題を提示しない条件(統制条件)を設けた。介入条件では、「自分をからかうギャグや面白い一言を考えて、使ってみる」などのユーモアトレーニングのための 5 つの介入課題(Mcghee、2010 をもとに作成)を提示し、2 週間、日常生活の中で実施するよう教示した。介入条件の夫婦双方ともに課題の説明を Web 画面上で提示した。また、事前調査後１週間が経過した時点で、介入群にはリマインダーメールを送り、課題の説明を再提示した。そして事後調査において、ユーモアコーピングを再度測定した(夫 α= .95、妻 α= .94)。その際、介入群には、課題をどの程度実行したか(独自に作成した 5 項目; 夫 α= .89、妻 α= .89)について回答を求めた。

４．研究成果

(1)調査Ⅰ

怒り喚起の頻度が怒り表出の頻度を規定し、怒り表出の頻度がパートナーの怒り被表出の頻度を規定し、被表出の頻度が怒り喚起の頻度を規定する、というモデルを想定した。その上で、怒り喚起の頻度が夫婦関係満足に及ぼす影響、そして自己愛傾向、および対人ストレスユーモアコーピングが怒りの表出の頻度に及ぼす影響を検討した。モデルの妥当性を検証するために、共分散構造分析を行った。上記の想定されるパスを設定し、さらに自己愛傾向と対人ストレスユーモアコーピング、および夫、妻それぞれの夫婦関係満足の誤差項同士には共分散を設定した。これらの設定を行った上で分析したところ、適合度指標は CFI = .97, RMSEA = .04 となり、データに対するモデルのあてはまりは良好であった(Figure1。誤差項、共分散は省略)。

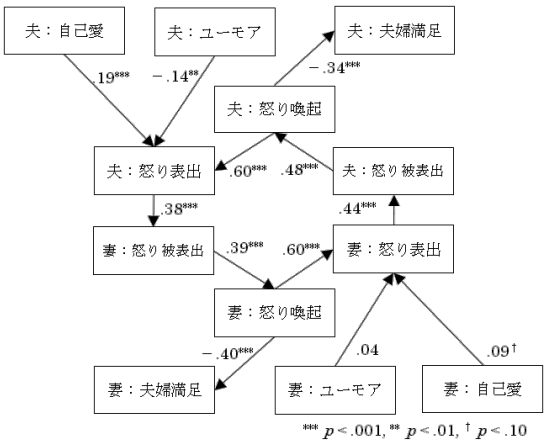

Figure1　共分散構造分析の結果

夫婦ともに怒り喚起の頻度は夫婦関係満足に、また、自己愛傾向は怒り表出の頻度にそれぞれ正の影響を及ぼしており、仮説は支持された。対人ストレスユーモアコーピングについては、夫のみ怒り表出の頻度に有意な負の影響を及ぼしていた。なお、自己愛傾向と対人ストレスユーモアの間には夫婦ともに正の相関(夫: r=.27、妻: r=.28、いずれも p<.001)が確認され、自己愛傾向の高い個人にとって、こうした対処方略は獲得しやすいことが示唆された。

自己愛傾向とユーモアとの関連性を検討した研究は国内ではほとんど行われておらず、また海外においても自己愛性対人葛藤を抑制する要因としてのユーモアはまだ注目されていないため、この知見は新たな対処方略の可能性を示したといえよう。今後はこの関連性をさらに精査していく必要がある。

(2)調査Ⅱ

夫婦ペアデータの APIM (Actor Partner

Interdependence Model)を行うために、階層線形モデルを用いた(Table1)。事後のユーモアコーピングを従属変数とし、自分と配偶者それぞれの自己愛傾向および事前のユーモアコーピング、性別(夫 = -0.5、 妻 = 0.5 でコード化)を統制変数として投入した上で、条件(統制 = -0.5, 介入 = 0.5 でコード化)の効果を検討した。また、条件と他の要因との交互作用項も投入した。

Table 1　階層線形モデルの標準化係数
(従属変数 = ユーモアコーピング事後)

ユーモアコーピング事前(自分)	.618 **
ユーモアコーピング事前(配偶者)	.052 *
自己愛(自分)	-.011
自己愛(配偶者)	.034
性別	.002
条件	.042 +
ユーモアコーピング事前(自分) * 条件	.015
ユーモアコーピング事前(配偶者) * 条件	.008
自己愛(自分) * 条件	.021
自己愛(配偶者) * 条件	.020
性別 * 条件	-.007
R^2	.423

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

その結果、事前のユーモアコーピングは、自分だけでなく、配偶者の効果も有意であった。条件の効果は有意傾向であり、限定的ではあるが Web を通じての介入の有効性が確認された。また、自己愛傾向と条件との交互作用はみられなかったことから、介入効果は自己愛傾向の影響を受けないことが示唆された。ただし、課題の実施度は全般的に十分とはいえなかったため(「1.全然実行できなかった」から「4.よく実行できた」の 4 件法で夫 M = 2.18, SD = 0.69、妻 M = 2.16, SD = 0.69)、今後は課題の内容の再吟味とともに、課題実施を促す方法についても改善が必要である。

本研究は国内におけるユーモアトレーニングの有効性を検討した初めての研究である。近年の海外の研究においては、当初想定されていたトレーニングよりも、短期間かつ簡略化された内容においても効果が認められることが明らかになりつつあり、比較的手軽に実施できる本研究の方法も、こうした研究の流れに位置付けることができる。今後はさらに知見を集約して、対象者の負担が少なく、より効果的な介入を目指す必要がある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計３件）

①阿部晋吾、自己愛傾向と対人ストレスユーモアコーピングが夫婦間での怒り表出に及ぼす影響、日本社会心理学会第 55 回大会、2013 年 11 月 2 日、沖縄国際大学（沖縄県宜野湾市）

②阿部晋吾、Narcissistic husbands should have a sense of humor: The effects of humor coping on narcissistic anger expression in marriage.、European Conference on Personality、2014 年 7 月 18 日、ローザンヌ（スイス）

③阿部晋吾、夫婦を対象としたユーモアコーピングトレーニングの有効性：自己愛者への介入に注目して、日本社会心理学会第 56 回大会、2015 年 11 月 1 日、東京女子大学（東京都杉並区）

６．研究組織

(1)研究代表者

阿部　晋吾（ABE, Shingo）
梅花女子大学・心理こども学部・心理学科・教授
研究者番号：00441098